

発症から35年余を経ても癒えぬカネミ油症

——日本と台湾における油症被害の追跡調査

カネミ油症油症被害者支援センター* ●坂下 栄

はじめに

日本での油症事件は1968年、それより10年遅れの1979年、台湾油症事件が発生した。日本の経験は生かされず、同様なPCBによる加熱方式を取っていた。日本のカネミ倉庫または鐘淵化学の関与の有無を明らかにしたいと努めたが、未だ明確ではない。日本では1万4000人前後が届け出、1871人がカネミライスオイル被害者として認定された。台湾で被害者が集中している恵明学校では、生徒、教師そして職員の子弟も含め、2000人前後が食し、盲目者・弱視者のための寄宿舎（クリスチャン経営で無料の学校）では約200人が3度の食事を摂り、甚大な被害を招いてしまった。当時、事務局長だった男性被害者は、安くて健康に良いと言う理由で自分が米ヌカ油を調達したことから、子どもたちにまで被害を招いたことに、未だに後悔の念にさいなまれていると言う。しかも、すでに1972年にはPCBの加熱による副成物、ダイオキシン類も含まれていたことが新聞発表されていた。

事件当初の認定基準は、塩素ざ瘡、顔面・手足の爪・口腔内などの色素沈着、マイボーム腺分泌過多であった。台湾は当然日本の基準を参考にしたものだった。

カネミ油症被害者支援センターは、事件後約30数年経過した時点で、被害者がさまざまな疾病、一人で幾つもの病を抱えて苦しんでいる現実を知り、現地自主検診、健康実態調査に着手した。

結果、男女とも正に全身病と称されるに相応しい疾病が明らかになった。そこで、同様にPCB、ダイオキシン類を経口的に摂取した、台湾油症被害者についても調査比較検討し、これら化学物質によりもたらされ

る疾病・病態をより鮮明にし、認定基準の見直し、未認定被害者の認定の一助にする目的で着手した。

カネミ油症被害者支援センター 設立までの経過と活動

支援センターの設立まで

支援センターの結成を呼びかけた「止めよう！ダイオキシン汚染・関東ネットワーク」では、1999年イタリアで開催されたダイオキシン国際会議に油症被害者と共に参加し、PCB・ダイオキシン類を直接的経口摂取した世界唯一の被害の実態と政府の取り組みの実情を訴えるとともに、ダイオキシン研究の第一人者であるミラノ大学のモッカレリ教授や、農薬製造工場の爆発事故により、大量のダイオキシンを被曝したセブソの被害者と面談・交流、今後油症問題に関する情報交換や国際会議の開催などの面で協力を約束した。

2000年に、原田正純氏を団長とする自主検診調査団に関東ネットワークより参加、長崎県五島や福岡県内での検診、聞き取り調査開始。

2002年6月、支援センターを設立、油症研究班のこれまでの調査研究結果の学習会の開催や、とりわけ次世代への影響関連で女性被害者に対する健康被害アンケート調査に着手、また、厚生労働省等への働きかけによって近年行われていなかった未認定被害者に対する検診を実現。各省庁との交渉を重ね、被害者の経済的・社会的な生活保証の要求、人権救済活動を進めてきた。

その後の高木基金関連の主な活動経過

- 2002年8月 「日台環境フォーラム2002」（東京）で台湾のNGOグループとの交流が実現し、今後油症問題に関する日台共同活動の推進について合意。
- 2002年10月 「アジア・太平洋環境会議」参加後、台湾油症被害者支援体制作りへの情報収集
- 2002年12月 カネミ油症女性被害者健康実態調査

●助成事業申請テーマ（グループ調査研究）

カネミ油症被害者の健康追跡調査と台湾油症との比較調査研究

●助成金額 2002年度 100万円

* センター運営スタッフ：石澤春美、伊勢一郎、大久保貞利、小椋和子、鎌田玲子、佐藤禮子、塩沢豊志、竹内正美、藤原寿和、水野玲子、山岡 央、吉川浩一郎、渡邊千鶴子、(アイウエオ順)

アンケート開始、聞き取り調査の継続

- 2003年3月 第2回 高木基金助成決定
 - 2003年7月 男性被害者健康実態調査票の作製、調査開始
 - 2003年8月 国際ダイオキシン会議への参加・報告。台湾・日本油症研究専門家との交流
 - 2003年9月 台湾油症被害者の実態調査のための準備。調査票翻訳依頼、台湾への発送
 - 2003年10月 日本弁護士連合会 第46回人権擁護大会（松山）へ被害者実態報告・交流
 - 2003年10月 台湾主婦連盟集会へ参加。日本カネミ油症被害者の実態調査の報告、台湾油症被害者支援の呼び掛け、台湾油症被害者健康実態調査への協力を訴える。
- 台湾油症被害の集中した恵明学校において、台湾油症被害者・台湾油症専門研究者・台湾主婦連盟・環境運動団体との交流の場の実現、台湾内での支援体制作りを約す。
- 2004年1月 日本弁護士連合会へ「人権救済の申し立て」146名（未成年者10名含む）。継続中。
 - 2004年2月 日台環境フォーラム（台湾）にて以下のことなどを実現。
 - ・カネミ油症被害者支援センター 調査結果の発表。
 - ・台湾油症被害者の参加、日本専門家の問診、センターメンバーとの交流。
 - ・日台油症研究専門家の参加・交流。
 - ・台湾被害調査への協力再依頼。
 - ・台湾油症被害者の実態調査票受理。

- 2004年4月 センター主催の調査報告会の開催。カネミ油症女性・男性被害者・台湾被害者について報告。

調査の結果

現在まで収集済みの日本男女の調査結果、台湾調査結果および対象群（日本国内の非被害者に同じ調査票に記入してもらったもの）と合わせて報告し、比較検討を試みる。現在も調査票依頼中のため、中間報告となる。

調査数 日本：女性被害者67名（20～80才）
 男性被害者40名（33～85才）
 台湾：女性被害者8名（36～70才）
 男性被害者4名（30～72才）
 対照群：女性一般78名（32～80才）
 男性一般20名（21～88才）

〈注意〉データの理解を容易にする目的で、ビジュアル化・グラフ化しました。これらのグラフは傾向を見るために数値化を試みましたが、数値そのものは絶対的なものではありません。理由は、記入し難い部分があったので、記入量が人によってさまざまでした。筆記するには体の状況もあったのかもしれません。または、高年齢の方では、通常の人でも出るような症状と判断したため、書かなかったことも想像できます。さらに今後調査を増やす予定ですので、数値は変わっていきます。しかし、おしなべて傾向は変わらないと推測しています。

■日本女性調査結果

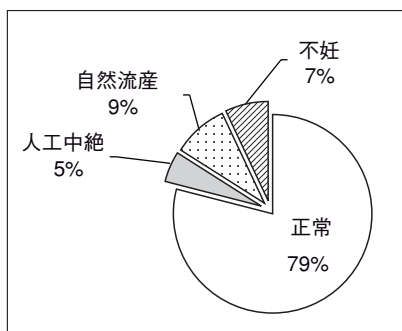


図1 対照群・出産異常（児数比率）

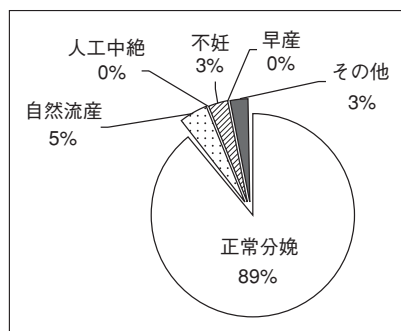


図2 摂取前・出産異常（児数66名）

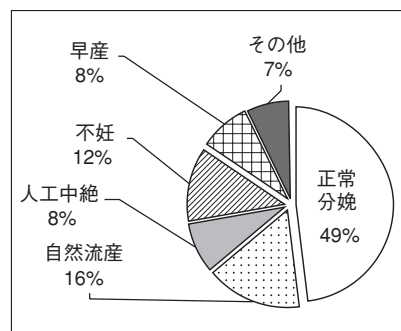


図3 摂取後出産異常（児数83名）

① 出産異常について（図1～3参照）

（同一母親からでも、摂取前と摂取後の出産児を分けた）対照群（非摂取者）78人中、異常出産は合計しても21%。対して、被害者（ライスオイルを摂取した人たち）は、摂取前と摂取後の出産で大きく異なるが、摂取前に出産した場合、対照群より異常が少ない。これは、対照群は32才から80才と幅広く、若い人たちの出産に異常が増加していることを示唆した結果である。すなわち摂取前出産は、母親が現在高齢者であり、化学物質の影響が少ないと推察される。しかし、摂取後の出産異常は、前二者に比し、顕著なものである。

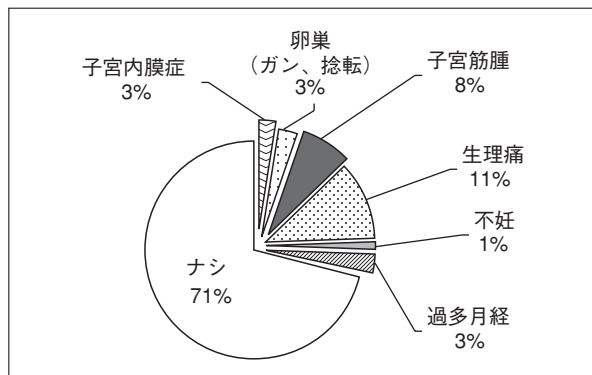


図4 日本女性生殖器疾患（対照群78名）

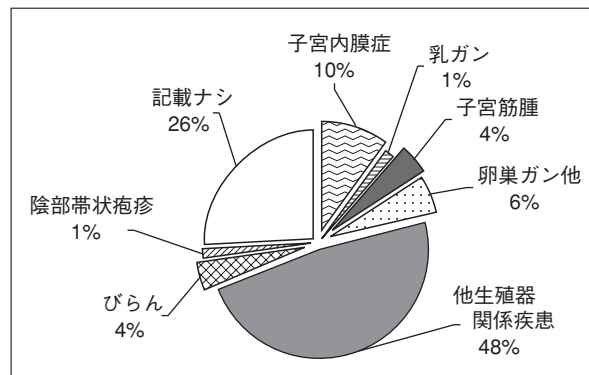


図5 日本女性生殖器疾患（被害者67名）

②生殖器関連の疾患（図4、5）では、疾患ナシが対照群71%に対し、被害者では、疾患ナシが26%に過ぎない。中でも、子宮内膜症、ガンが目立つ。その他の疾患は、無月経 無排卵（22才時摂取）、子宮頸部異形成、過多月経、前置胎盤など。

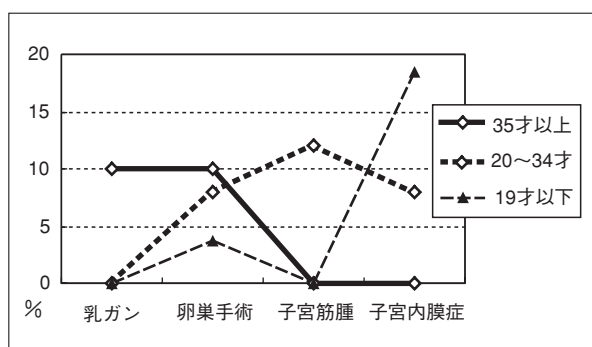


図6 日本女性被害者生殖器疾患（摂取年代別）

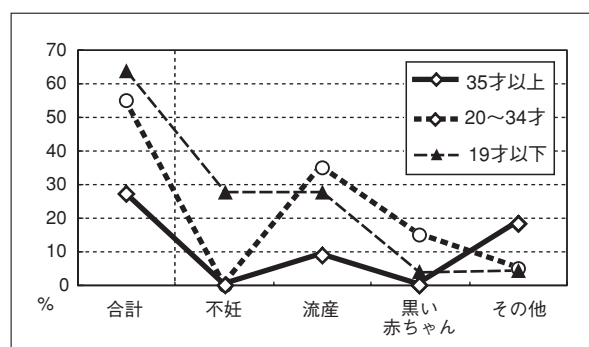


図7 日本女性被害者出産異常（摂取年代別）

③次に被害者のライスオイル摂取年代を3段階に分けて検討した（図6、7）。

生殖器関連の疾患は、摂取年代が大きく作用することが明らかとなった。高齢で摂取した場合（グラフの35才以上の部分）、乳ガン、卵巣ガンなどの発症が高く、低年齢で食した場合（20～34才の部分）、子宮内膜症、子宮筋腫が顕著に増加している。図7の黒い赤ちゃんに注視すると、19才以下の場合、殆んどの方が不妊または流産し、出産できずに黒い赤ちゃんさえ見られない。黒い赤ちゃんが、20才代で摂取した母親から多数出産しているのは、台湾被害者でも同様であった。

■男性・全身病・台湾との比較

表1 男性被害者の特記すべき疾患（人数による率）

	対照群	台湾被害者	日本被害者	
	%	人数比率	%	条件
前立腺ガン、肥大	5.0	1/4	37.5	摂取1歳以上=37名中
不定愁訴	5.0	4/4	65.0	全被害者40名中
生殖器・泌尿器系の異常	10.0	4/4	60.0	全被害者40名中・前立腺ガンも含む
骨折	5.0	1/4	20.0	全被害者40名中
脳梗塞	0.0	0/4	17.5	全被害者40名中、内1名は9才で摂取
視力低下・異常	0.0	2/4	50.0	20才以下で摂取者8名中、内2才摂取緑内障1名
疾患なし	80.0	0/4	0.0	

（参考）国立ガンセンターより：死亡者中 前立腺ガン死 4.20%

表2 次世代で見られる異常の例

異常	人数	摂取年代
学習障害・多動症	1名	0才で摂取児（3名中1名）
陰茎（半分無形性）	1名	0才で摂取児（3名中1名）
尿路関係異常	2名	0～2才で母体内摂取児（3名中2名）

- ①表1 男性被害者の典型的な疾患。いずれも対照群より数倍から数十倍の罹患率を見る。台湾については、4名のみの調査であるため、人数比率の数字にした。
- ②表2 本人たちは直接摂取していない次世代（父親が摂取）に出現している重篤な疾患例を書き上げた。



五島・福江にて自主検診風景



台湾・恵明学校での交流会

調査結果から見えてきたもの

両国の調査結果は対象数として、とりわけ台湾被害者において不十分といわざるを得ないが、現時点で明らかになったことを箇条書きにする。

- ①人工化学汚染物質は一旦人体に取り込まれると容易に排泄されず、それは数十年にもおよびガンを始め全身病として（人体の総ての系統に関わる疾病）の症状が発症しつづけ、その毒性は次世代にも影響していることが改めて判明した。
- ②全身性疾病の中では、外部からはその苦しみを知れない不定愁訴、自律神経系が特徴的で、日本男女、台湾男女で共通していた。
- ③男女とも、生殖器に関わる疾病が顕著である。すなわち女性では卵巣ガン、子宮ガンや子宮内膜症が、男性では前立腺ガンや前立腺肥大の罹患率が高い。しかも、これら疾患の発症は、摂取年齢に大きく左右されることを推測させるものであった。
- ④男女で差のある疾病は、女性に甲状腺ガンを始め甲状腺に関わる疾患が多発しているのに対し、男性では殆ど見られないことである。

今後の課題・活動目標

油症被害の認定基準は、わずか数項目であった。認定、未認定いずれも、そして日台いずれの被害者も、長い年月、治療法もなく、国の対応も支援体制も不十分のまま放置されて来た。

今回、当センターの健康実態調査は、こうした体制を打破することを目指し、開始したものである。結果、PCB、ダイオキシン類の人体影響は、全身的、長期的であり、次世代・次次世代にまで及ぼすことも見えてきた。

人工化学物質汚染の人体への影響が国際的にも問題

になっている今、油症被害調査は、広範囲な問題に示唆を与えるものである。

さらに調査数を増やし、データの濃度・信頼性を高めることを今後の課題としている。

台湾では油症被害の専門的研究は日本より進んでいる部分もあるようだが、被害者と専門家の直接的交流は乏しかった。また、一般では油症被害を知る人は少なく支援体制もなかった。しかし、今回の日本からの呼び掛けにより、台湾主婦連盟の女性たち・環境運動グループが被害者と会い、調査に協力してくれる中で被害実態を理解、支援の必要性を認識し、日台環境フォーラムを共催するまで積極的に油症問題に取り組みはじめた事は調査の成果と言える。

当支援センターの活動が、国、そして油症研究班を少しなりとも動かし始めたことを確信している。例えば、不十分さや監視の必要性を感じさせるものの、基準の見直しに着手し始めたこと、有効性は別としてダイオキシン類の血中濃度測定開始、被害現地での検診実施、女性医師の派遣などに垣間見られる。

今後は、これらの活動を一層推し進め、結果として治療の諦めや、社会的人権侵害に浸されてきた被害者、何よりも未認定患者の掘り起こしのきっかけに、治療保証や生活保障などを獲得する活動に、生かす素材になればと願うものである。

最後に、高木基金からの助成のお陰で、心置きなく調査の中を広げることが可能となり、同時に、自信と励みと新たな責任を自覚する機会を与えられたことに、センター一同心から感謝している。

また、さまざまな苦痛の中、本調査にご協力くださった油症医療恒久救済対策協議会会長および被害者に心からお礼を申し上げます。